揚隆院之墓
戸ニ有十五歳八月廿四日未明往去

備るぬさもゆかりとよし續し
山ざとたよとの國の名をぬきみちあつ
家まつ大江氏の嫡原ハ
豊後の草まして兎とりの書記
編く卵のもて何をひとす
なを襟へありく函ゆかずかく

序

玉ハよき泥の石の枝まハ
花とよ絵にされの中ハ似
擢くらけしハ河らてとも
よしの山清至也那

浪花南郷叢林

古恵雁 誌

歌仙

別府君湯の山をたまふ

時え其志すし甚寄なれと

よき枕並目おくれおちまてる 旧源ごとく

秋風は美川由布嶽と物くれ 國平

阿蘇と隣に咲とかわる萩 蚢平

あら磯や様と寄る舩月擇く　平
さき風にあまれ声空乃浪　國
むら雨く松の葉の落る音　同
群る鷗者遠くかさ川　平
とゆくゆ嘴を把る駕籠の肴　同
古井さしへくそも新し　丞

月のさえ須磨と亜浪来雨　同
筆にかさまれ蝦者道為　平
篭捲く櫟と捨ふ妹　同
うれ宿りそ郭く撞のとこあり　國
世いまれ羽織とる宅に深る岩　同
首傀こらゆ　猫の声　鵬平

ほつくと岩をくゞし里乃家　平
東雲を出し二日路の不二一　圃
花ふ気をとゝめくつしる養錦　可
野い花くりとゞめ字欲　平
丁淺ク蛙（カハツ）見ゝく跡を眺し　可
焼まくされ古下結ふ也捨　圃

思ふまゝにふれ乃名計　待つ女　可
啼けく秋をまし夕日の花　平
汲て酒の色奥と奈かゝみ　可
鑓のふところ魚　虹り打さ　圃
有る山とさゝ月の色白く　同
芋の露　排けく旬乃書さし　平

虫の音も已くかすかなり　平

こほれしかきはに流るゝ有　四

一方は石に横る竹垣し　同

投乳火縄に瓶なとへく　平

京近くそゝろにありし噂淀　同

郁輸のふる志しあまかん　四

郭しさ待学郎し人をあり　同

あかつきくよつ起針喉　平

小さしも陽気ぞ花の無くせ　同

蝶と哉もと起猿の居ましさ　四

瓢一つと命ありあり今朝の風
月もはしく二人つれ寄る
ちらにえかゝる風の音信
一行よ読みよらす

桃花隠 雲い桜より 蕀(ムハラ)うか 蝣雲

黒鴨勝ぬ 古池の輪陀(リダ) 蝣平

雑樹乃草鍬定 嗜風隠て 同

苞(ツト)乃もの干乳 宿の面まゝ 雲

ちゝや燃 桐も月比当なる 同

礎石者 稼ちま 秋の海気 平

鏡的 象とい 捻く帰る人 同

根まもに年の釣 倒(タヲ)も松 蒸

入梅と地震の間かな　藤吉　素
後の茶と常にさそふに　平
れしなひ隠し女のすかげに　同
角実寇け口と綴く冬に　義
茶迄きに岸の忠とよの紀通　同
月明る月いかるに　日明足　平

ひく〳〵起きれ　康の毛と振ひ　同
露もつなぎ　山住の科　義
花の後樽と纏樽に笑ひ揚　同
柳ちる後く形りのまけある　平
新手の溜石にかけく鳴く蛙　同
春風しり　投し〳〵るかさの簾

うつらく旅寝の窓に稲かけを　萬
かける出こを粘（ソクヒ）ますく張　平
折しも花を移稲にうつの邪（ヂヤ）形（ナリ）　閑
三（ミ）更（サラ）藪し　喧る　大穢　萬

暮るゝ夜を専らにし炬燵す
足とりけ啼を従よ明る時
さ指もしく志つまれ障子
の風えもし自頭といやりと
明るしき道のあつらむ夕かれ　流巴
鰥（フクト）ばつかく薦の車井　蝶平

鴫こそ起 枯木になる風さむし　平

日乃落る切 高山のうけ　巴

畑守も一ツに月の影おほく　同

露のかゝる 川船の纜　平

ひらしと見へし穂蓼もかれかけ　同

火の見紙は窓紀藁（ワラ）雄去　巴

佛むかふ雪にのみゆし 供の花　同

舌出に犬の 石を背を揃れ　平

下諸の叢乃ねぢそ揚る 蕣乃雨　同

羽織かりくるむ 書文　巴

思案のかけて月の飾りく　同

落葉をしろにくねる 粉香　平

春日山陰るを志らへゆく　平

瓢たるまゝ乃こ掛し菴　巴

高らく半引し公家の息じ　同

珊瑚もしもて花の色と紀　平

東風をふき家へて動く釈迦の像　同

菅笠の緒と志づる坂中　巴

月すまくいる戻きぬ覚え　同

流とうさくごんり紀草　平

主かしこ打てらのすけ代　同

蝶のかきまる所しそあ絶　巴

貝のうら絶ゆ促捨し浪かるん　同

うせしる業せる衛くしと嘆　平

老猫の玉やりもつる夕の隈　平

秋風辛く啼なる欄　巴

咳嗽とこゝろへて思ふ長寝し　同

手燭手つから恋の間えかし　平

自ラ出思ひかりまみえのかて　同

錦着る上に若けへさまを餝ころく　巴

ばらくとまつて短く抱き縄　同

道ては吐と述る嘱去　平

我里乃文書やめし花盛　同

謝の座了し秋ちけきる藤　巴

暮残霧ありしは色黒
あかりとて八官蕊かんと
かざしけり雉子
うらやましに
朝嵐竹頬(ホウ)にこぼさるゝか　御平
馬(ハ)氈(セン)こそ毛野路の虎杖(イタトリ)　蟟平

ほんのりと雪解の水に雪消て　蜿裏
月こそ風張りし縮む墨褁　研塵
逢く露に寄りてかさまる〈の親　如山
菖蒲藥祈まつく初めりし吹　桜径
箏(メカニナ)のありやかゝふ夜の気を緊　可笹
をのまあどふく鞣さくきなり　丹卜

このあたり花山なる残り山　蜷塊
雑子ならく草酒されて程経ば　流巴
摘らわく新の露見る菖蒲かな　山行隠　和南
秋の暮ハ前むるる月に鳴てゝり　蜷興
鄕寄ま葉(ふへ)てきゝり八主　様　高田常盤　鯉水
道く鳴牛ハあぶ押し出た首　日金谷　冬峯

ありさや我門松も二ながく　蜷農
子の観りかへ和かり屠蘇の酒　砂鹿
門松ハ初塩漬の見くしかば　玉子境　知竹
塩竈とかけくかほしなきの花　大流
屠蘇の酒波先ハ平わ和しぞ宿　蜷雲
せ乳猫や人手やしき漬の市　芝崎子家　如軒

綿ぬきや下に布子と着かへても　叙　不木

元朝や我身あらたに鳴りけり　芝浦古居　湖石

紅梅と出かくぬしもや若菜人　不木

いつくても批判は入るや丸竜橋　亭柳

浮雲や切もあらしすすの山　梅枝

市中閑居

月雪の伏えまみけり冬籠り　孤高斎　文十

八景　高田長流

一帯深川落海門
濫觴不識幾山原
有時来往以舟楫
今古洪流徹底渾

さうつきや御一かつかくある色　前川　仙平

揚弓歸帆

水國浸雲映夕暉
漁家髣髴片帆歸
忽驚鷗鷺翩々急
疑眼滄洲欲意微

十三歲 來山

帆と見え羽はくろのそらあるし

利山晩鐘

遥見夕陽収遠山
疎鐘殷々落人間
杖藜旅客仙々急
料識老僧楽夜間

隔る瀬や行とも見へて喚子鳥

曳尾堂 万湖

芝崎夕照

隔河連岸有人家
薄暮翠烟似篭霞
側耳凝眸鐘纔報
夕陽更見惑帰鴉

夕栄に秋の日なかし海の色　洒落斎 露凡

高洲落雁

寂寞軽沙飛暁風
江波四面涵寒空
誰家書信達何処
倦翼横斜憩水中

淳平

雁金や遅き筆しるす州のうへ

雁嶺暮雪

嶺頭暝色顕陰雲
六出飄々散月曛
窓下御着寒徹骨
山翁知是早宣禧

右 蟾平

かへるは富ヶ嶺より雁のこゑ

大江氏蜥平公撰掃地坊主書乃
誹諧也欲巻首載於高田八景詩需
予為之嗚呼雖非枯句之皮膚之
塵垢也哉之且同郡夷村岩
海者云擱句於識毫世是亦
請以予狗皮續彼貂也不得辭
之聯到十句則並之一笑

五言城

莫累門松緑　夷
岩海

くはなくさめ玉ひて嬉しくと ひきの
なかとともにぬめのまぬ

摂陽城北東瓢菴隠士校

破瓢叟

寺町通二条上ル丁
かつや庄兵衛板